【第48回広島大学教育学部国語教育学会・研究協議】2

中学校における小説の学習指導

――新教材を読み解く――

寺澤紀子

はじめに

広島市では平成18年度から新しく光村図書の教科書が採択された。「国語1」で4月から7月までに取り扱う小説教材は、「にじの見える橋」「麦わら帽子」「大人になれなかった弟たちへ」の3つである。「麦わら帽子」と「大人になれなかった弟たちへ」は、平成14年度版にも掲載されているが、小説の第1教材は「親友」から「にじの見える橋」に代わっている。過去の教科書も見たところ、「大人になれなかった弟たちへ」や「少年の日の思い出」は定番教材として掲載されているが、第1教材は改訂のたびに新しいものになっている。このたびの改訂で「にじの見える橋」が採用されたことが、中学校での小説との出会いにおいてどうであったのか、学習を進める上で生徒にどのように受け入れられたか。本稿では、この4ヶ月間で学習指導を行なった「にじの見える橋」と「麦わら帽子」の二作品について、実践したことを振り返りながら述べてみたい。

Ⅰ　小説の学習指導における課題

学習指導要領にある「読むこと」の指導事項の中で、小説の読み取りで身に付けさせたい力に関わるものとして、第1学年では

ア　文脈の中における語句の意味を正確にとらえ、理解すること。

エ　文章の展開を確かめながら主題を考えたり要旨をとらえたりすること。

オ　文章に表れているものの見方や考え方を理解し、自分のものの見方や考え方を広くすること。が挙げられる。

まずアでは、語句が文脈の中でどのように用いられているかをとらえることによって、文章をより深く理解することができる。文章の読み取りにおいて、辞書を有効に活用することはもちろんのこと、辞書的な意味に終わらず、文脈の中でどう表現されているのか、その表現効果はどうなのかということも考えさせることが大切である。

次にエでは、叙述に即して展開をおさえながら、その文章の中心的な内容をとらえ、それを元に生徒一人一人が豊かに考えることが求められている。小説の読み取りにおいては、通読して全体をとらえ、さらに登場人物の変化やその変化が表す意味などを考えていくが、その際に読み取りのポイントをわかりやすく示し、生徒がどんな小説を読み取るときにもポイントを押さえて読み取れるような「読む力」を身に付けさせたいと考えている。

オでは、登場人物のことばや生き方の中に様々な形で表れているものの見方や考え方をとらえ、新たなものの見方考え方を発見したり、共感したり批判したりしながら、生徒はより豊かなものの見方や考え方を身に付けていくことが期待されている。中学校での国語科学習の最初に出会う教材が身近な内容であること、あるいは主人公の心情に共感できる部分があることは、生徒にとっても学習にスムーズに入れるうえに、自分と比較して共感したり批判したりすることができる。最初の教材が生徒にとって受け入れやすいかどうかということは、これから後の文学的な文章の学習にもつながっていく。生徒が「小説はこんな具合に読み取っていけばいいのか。」と気付く学習にしたいものである。

ところで、4月に初めて小説の学習をする時、「小学校で、物語や小説の読み取りといえば何をしたか覚えている?」と聞いてみたところ、「うーん? あんまりよく覚えていないけど、主人公の気持ちを読み取るとか…」という答えが返ってきた。だいたいどのクラスでも同じような答えで、小説の読み取りといえば主人公の気持ちを読み取るととらえているようである。

小学校第6学年では、文学的文章の学習において「人物の心情を叙述に即して読み取る」「作品に描かれた情景を想像しながら読む」「人物の生き方や考え方を言葉や行動から読み取る」ことを目指している。まさに生徒の反応のように、主人公の気持ちを読み取る学習が中心に行なわれていたと言える。

しかし、「では、主人公の気持ちをどんなふうにして読み取った?」と尋ねてみると「なんとなくわかった。」といった反応しか返ってこない。そのうえ「国語はどんなふうに勉強したらいいのかよくわからん。」「テストはまぁまぁ点がとれる。でも国語はあまり好きではない。」という声まであがった。

このことからも生徒たちは、「どんな力を付けるために学んでいるのか」「今日の学習のねらいは何で、どんなことがわかるようになればよいのか」ということをあまり自覚しないまま学習しているように思える。それゆえ、一時間の授業が終わっても、その時間でどんな力が付いたかということを振り返ることもせずに、なんとなくその教材が終わったら「終わった!」ですませてしまう。これは小説の学習指導における大きな課題といえる。どの学習においても、生徒自身がねらいを明確に持ち、その時間でどんなことが身に付いたのか、あるいは不十分だったのかということを自覚することが必要であると考える。

光村図書の「国語1」では、小説教材の出会いとして「にじの見える橋」が、2番目に「麦わら帽子」が採用されている。公立中学校の第1学年には、小説の読み取りに対して興味・関心の度合いも、読み取りの力も様々な生徒がいる。「読む」ということにほと

んど興味がなく、朝読書でさえもなかなか自分の本と出会えない。まして、家庭で読書をすることは全くないという生徒もいる。そういった生徒にも「わかった。」「読めた。」という感覚を抱かせることは、中学校における小説の学習の第一歩として、大きな役割があると考える。そういう出会いが、次の小説の学習へとつながり、最終的には自らの読書生活が豊かになることに結び付くのである。

Ⅱ　生徒の実態

広島市立大州中学校第1学年の生徒は、全体的に幼く、表現する力も拙い。そのため、友達とのコミュニケーションがうまく取れず、些細なことでトラブルになる。授業中でも、不規則な発言や荒い言葉づかいが出ることもあり、授業規律の定着にもかなりの努力を要する。

また、生徒たちは「よぅわからんけぇ、嫌い。」「めんどくさいのはいや。」とよく言う。授業者が「今の説明の仕方はわかりにくかったかな。」「学習の流れが込み入っていてスッキリまとまらなかったなぁ。」と感じたときには、「よーわからんかった。」「じゃけぇ、国語はいや。」などという反応が即座に返ってくる。逆に「今日はスッキリいったな。」「ポイントが絞れていたな。」と感じたときには「なんか、よぅわかった。」「わかりやすかった。」と言ってくれる。

生徒は、わかればうれしい。でも根気強く意味調べをしたり、長い文章を読みながら叙述を見つけることには抵抗を示す。必要に迫られているわけでもないのに、語句の意味調べをすることも苦痛である。

このような生徒たちに読みの力を付けるために、4月当初から学習内容はできるだけわかりやすく、中学校の国語の学習では、どんな力を付けていくのか。そのためにはどういうことに気を付けたらよいのかを話し、生徒が学習のめあてをしっかり持つことができるように留意した。

例えば、読む学習では、文章の種類に応じて読み取り方のポイントをできるだけわかりやすく示すようにしている。その際、学んだことを印象付けるような呼び名を付けるなど、次の学習時に想起しやすい工夫をしている。生徒は「心情を読み取る4つのコツ」や「小説の三要素」などの呼び名を聞けば、以前に学習した事項を思い出し、また思い出せなくてもノートをめくって見付け、確かめることができるようになっている。「読み取れた。」「できた。」という感覚を持ち、読み取りに慣れることが、長い文章も「読んでみよう。」と思う原動力になる。

学校全体が落ち着かない状況の中ではあるが、わかりやすさを常に意識して指導を工夫するよう努力している。

Ⅲ　指導の工夫

第1学年の生徒が、中学校の国語科学習で最初に出会う小説（物語）は杉みき子の「にじの見える橋」である。この教材は文章も短く、「にじを見たこと」を中心に主人公の心情がマイナスからプラスに鮮やかに変化する。一読しただけでこれらのことが生徒たちに

も把握できるところが、初めての小説教材としては最適であると思う。主人公が生徒と同じ年であること、抱いている心情に共感できる部分が多いというのもよい。

また、2番目に学習する小説「麦わら帽子」は、「にじの見える橋」よりは少し複雑である。主人公の心情の変化に深く関わるものが2つ出てくること、情景描写やことばの微妙な使い分けなど、目を向けさせたい項目がいくつかある。しかし、この教材も主人公の成長していく姿と生徒たちとの共通点も多く、生徒は自分の経験と重ね合わせながら読み進めていける教材である。

これらのよさを活かしながら、生徒に「小説の読み方のコツ」を理解させるように学習指導計画を立てた。その際、読みを深めるために次の6点を工夫した。

① 学習のねらいを明確にすること

「自己評価シート」を活用して、その時間の学習内容、ねらいを明らかにする。授業の最後には本時で学んだことを振り返り、身に付いたこと、不十分だったこと、発見したこと、今後努力することなどを2文以上で書かせるようにした。

② 小説の読み方を理解させること

「小説の三要素」や「心情を読み取る4つのコツ」のような印象的な呼び名を付けて、小説の読み方をパターンとして理解させるようにした。

③ 話し合い活動を組み込むこと

2人組や4人組で話し合う活動を取り入れ、互いの考えを交流することによって異なる読みに気付き、自分の読みを深めることができるようにした。

④ 書く活動を取り入れること

本文から読み取れたことを別の表現に置き換える活動を取り入れ、自分なりの読みを持つことができるようにした。

⑤ 言語事項に関する指導を取り入れること

語句の使い分けについて考えたり、類義語に言い換えたりすることで言語に着目し、言葉に関する理解を深められるようにした。

⑥ 音読の工夫をすること

声のレベル、気を付けるべき点を明示して、読みを深めるための音読や、読み取ったことを表現するための音読などを考えさせるようにした。

Ⅳ 指導の実際

1.「にじの見える橋」における学習の展開

次	時	学習のねらい	学習活動および工夫	資料・支援など
Ⅰ	3～1	◇小説の読解では、一読後に把握すべきこととして「小説の三要素」があることを理解し、「三要素」をとらえることができる。 《学習のねらいを明確にする》	○段落ごとにリレー読みし、登場人物・背景・事件をとらえる。 ・あらかじめ小説にはなくてはならない三要素があるということを話しておく。	◎「自己評価シート」 ◎「小説の三要素」と書いた板書カード ＊「ハリーポッター」を例に挙げて説明することで、興味を持てるようにする。

次	時	学習のねらい	学習活動および工夫	資料・支援など
Ⅰ	3～1	◇主人公の心情の変化を読み取るために、どういう表現に注目すればよいかを理解し、「4つのコツ」に沿って叙述を抜き出すことができる。 《小説の読み方を理解する》	○事件（主人公が大きく変化するきっかけとなるできごと）を挙げる。 ○事件の前後で主人公の心情はどう変化したか。おおまかにとらえる。 ・プラス、マイナスということばで簡潔に表す。 ○心情を読み取る手がかりの表現にはどんな種類があるか考える。 ・「心情を読み取る4つのコツ」という呼び名を付けて印象づける。 ○「4つのコツ」に沿って、マイナスの心情を読み取る。 ○同様にしてプラスの心情を読み取る。 ・4つのコツに沿って、整理することで目の付け所を理解させる。	◎国語辞典 ＊見つけにくい生徒には、サンプルとして会話や行動などのわかりやすい表現を挙げて、個別に確かめる。 ◎「心情を読み取る4つのコツ」と書いた板書カード ＊机間指導をしながら、つまずいている生徒には個別に支援する。

① **学習のねらいを明確にすること**

「自己評価シート」を使って学習のねらいを明示し、生徒が自覚して学習に取り組めるようにした。例えば、「今日は小説の三要素を理解する学習」であることを生徒にあらかじめ示し、自己評価シートの目標の欄に記入させる。生徒は「小説の三要素」とは何だろう？　という疑問を持つ。それが、授業の中で少しずつ明らかにされていき、ついには「三要素」の全容がわかるという流れである。そして、まとめとしてノートの下欄に大切なポイントとして改めて「三要素」を書かせる。さらに授業の終末で、自己評価シートの感想欄に「今日学んだこと、発見したこと、課題として残ったこと」などを書き込む。こうすることで、学習のねらいをもって授業に臨むことができる。

② **小説の読み方を理解させること**

小説の指導における課題の一つに、この教材では読み取れたが、別の教材ではまた一からしなければならないということがある。たとえば、「にじの見える橋」で主人公の少年の心情は読み取れたが、少し複雑な教材である「麦わら帽子」ではうまく読み取ることができないというのでは困る。第1学年の最後の小説教材は「少年の日の思い出」であるが、この作品は時代も背景も、心情の変化も複雑な、生徒にとっては難解な小説である。これを学習する時に、また一から小説の読み方を学習するというのでは、これまでの積み重ねが活かされていないことになる。一つの教材が終わるごとに「終わった！」というのではなく、次の小説でも活かされる「読み方」が生徒に理解されることが大切だと考える。

そのためにも、最初の小説学習では小説を読み取るポイントを理解させたいと考え、「小説の三要素」と「心情を読み取る４つのコツ」を繰り返し教えた。

「三要素」では、「ハリーポッター」を例に挙げて説明することで、具体的なイメージがわくようにした。生徒の中には本を読んでいるものも多かったが、読んでいなくても映画で知っている生徒がほとんどだったので、登場人物や地名などの名前を挙げながら理解することができた。

その後、「三要素」をとらえるために音読をする。漢字の読みの確認と、登場人物を〇で囲む、背景、事件に注目することを指示して、音読させる。音読にもいくつかの方法があるが、ここでは段落ごとにリレー読みをさせ、音読後に少し時間を取って確かめさせた。

次に事件（主人公が大きく変化するきっかけとなるできごと）の前後で主人公の心情がどう変化したかをとらえる学習である。「心情を読み取る４つのコツ」を発見するための学習活動でもある。まず、「にじを見た」前後の心情をプラス、マイナスで表す。前半のマイナスの心情が表れていると思われるところをいくつか挙げさせ、それを分類することによって「４つのコツ」に整理していく。

生徒は小学校での学習を活かして、叙述を抜き出すことはできるが、それを「４つのコツ」に整理することによって、文章全体から心情が表されている表現を見つけるポイントを身に付けることができる。この「にじの見える橋」は「にじが出てるよ。」「にじだ、にじだ。」という会話文をはさんで、前半部分にはマイナスの心情を表す叙述が集中している。生徒から次々と出てくる表現を少しずつ整理しながら板書し、「行動」と「心情表現」の２つを導き出す。後半部分からプラスの心情を表す叙述を抜き出させ、「会話」も付け加えていく。さらに前半部分の「黒くぬれたアスファルト」や後半の「赤、黄、緑、太いクレヨンでひと息に引いたような線」「このはなやかな橋」などから「情景描写」も心情を豊かに表すための大切な要素であることに気付くことができる。

こうして、小説を読み取る際にはこのような手順で行なえばよいことを理解させる。さらに、ノートの下４マス分を学習のポイントなどを書く欄にして、そこに「心情を読み取る４つのコツ」を改めて記録させておき、今後の学習で、すぐにめくって思い出せるようにした。

2．「麦わら帽子」における学習の展開

次	時	学習のねらい	学習活動および工夫	資料・支援など
Ⅱ	5～1	◇「にじの見える橋」で学習したことを想起して、心情の読み取り方を習得する。 《学習のねらいを明確にする》 《小説の読み方を理解する》	○教材を部分ごとにリレー読みし、三要素をとらえる。 ○２つのカギとなるもの（麦わら帽子とカモメ）と主人公の関わりの中で、心情を読み取る。 ・「４つのコツ」を使って読み取るように、常に示しておく。	◎「自己評価シート」 ◎「心情を読み取る４つのコツ」を書いた板書カード ◎キーワード（麦わら帽子・カモメ）のイラストカード

次	時	学習のねらい	学習活動および工夫	資料・支援など
Ⅱ	5～1	《音読の工夫をする》 （声のレベル） 1. 隣の人と話す 2. 班の中で話す 3. 教室内で届く 4. 体育館で 5. グランドで ◇読み取ったことを自分なりの言葉で表現し、読みを深める。 《言語に着目する》 《書く活動》 《話し合う活動》	・初めに麦わら帽子とマキのかかわりを読み取り、マキの変化に気づかせる。 ○最後の場面に出てくる「口をきかず」と「口をきけず」の違いについて、グループで話し合う。 ・まず、言葉の意味の違いを2人組で話し合い、発表する。その際、どのチームの説明が最もわかりやすかったかを聞き分けるようにさせる。 ○口に出さなかった（出せなかった）マキとあんちゃのことばを想像する。 ・4人組で話し合い、セリフ化して発表し考えを深めさせる。	＊心情を暗示する情景描写を見付ける際には、ヒントになることばを与える。 ◎話し合いの結果を書き込む枠（板書） ＊話し合いに行き詰まっているグループには、進んでいるグループの意見を一つ、参考に紹介する。

① **学習のねらいを明確にすること**

生徒は「にじの見える橋」で「小説の三要素」と「心情を読み取る4つのコツ」を学習しているので、「麦わら帽子」の学習に入る前に事前の学習を想起させた。「麦わら帽子」は「にじの見える橋」より少し長く、心情の変化の仕方も複雑なので、「麦わら帽子」と「カモメ」をキーワードととらえて分けて読み取ることにした。学習のねらいとして「麦わら帽子とマキの関わりを読み取る」というふうに本時のめあてを明示した。

② **小説の読み方を理解させること**

まず、主人公のマキと麦わら帽子の関わりに注目して、第1場面と第3場面を比較することにより、「新しい、大きな緑の、しゃれすぎている麦わら帽子」に対して「恥ずかしさ」を感じているマキと「形がくずれ、色も落ちて、おかしなぶかぶかの麦わら帽子」を「大いばり」でかぶっているマキの変化が生徒にも容易に見て取れる。その後、主人公マキとカモメとの関わりにおけるマキの心情の変化を、「4つのコツ」を活かして読み取っていく。すると、カモメとの関わりの中で体験する様々な出来事がマキを成長させ、「麦わら帽子」も「カモメ」もマキにとっては特別な価値のある存在になっていくことがわかる。初めは「おかしなぶかぶかの帽子を大いばりでかぶっているマキ」が理解しにくかった生徒から、最後は「帽子の形とかそんなことは関係ないんよね。」という感想が聞かれるようになった。

この教材では「4つのコツ」を活用して心情を読み取ることが学習の中心だったが、発表するときに生徒から「先生、これは心情表

現ですよね。」「これは行動。」といった発言がいくつも聞かれた。生徒は「4つのコツ」として頭の中で整理し、それを使って叙述を抜き出しており、小説の読み方のポイントが理解できていることがわかる。

③　話し合い活動を組み込むこと

「麦わら帽子」では、心情を読み取る学習の最後に、グループで話し合う活動を取り入れて読み取りを深める工夫をした。小説の後半で「小舟に引き上げられて、やっとおぼれずにすんだマキは、口をきかず、引き上げたあんちゃたちも口がきけず、…」という叙述があるが、この傍線部の意味の違いから両者の心情をより深く考える学習を行った。まず、隣り合わせて座っている男女2人組で二つの表現の違いをどう説明したら他の人に伝わるか、相談してノートに書かせる。次に全部のチームの代表者に発表させる。説明をしっかり聞いて、どのチームの説明がわかりやすかったか挙手をさせる。その結果、辞書的な説明よりも「麦わら帽子」の内容に即して説明した方がわかりやすいということに気付いた。

次に、同じ場面で「マキの言いたい言葉は、ぐっしょりぬれた麦わら帽子を抱きしめる、か細い腕が語っていた。」という叙述にも注目して、マキの言いたかった言葉と、言いたかったけど言えなかったあんちゃたちの言葉を想像してセリフの形で考えさせた。男女混合の4人組にしてグループごとに話し合ったセリフを板書させたところ、グループ同士の共通点や相違点に気付くことができた。その結果、マキにとってもあんちゃたちにとっても、この体験は大きな出来事であり、マキの成長につながったことがより明らかに読み取れた。

今回の学習でねらいの中心として取り上げた「4つのコツ」は、心情を表す叙述を抜き出すポイントではあるが、「抜き出せれば、読み取れた。」ではなく、表現の奥に隠されている思いも想像して、セリフの形で表してみることで、登場人物の心情をより深く考えることにつながったと思う。さらにまとめの学習にグループで考え、交流する活動を取り入れることは、生徒の読みを深めるのに有効であった。

④　書く活動を取り入れること

先に述べた、話し合い活動の前段階では、各自がノートに自分の考えを書き込むようにした。教科書の叙述から、自分で考えたセリフという別の表現に書き換えることは、その場面の登場人物の心情をより深く考えなければうまく書けない。説明的な文章にするのではなく、セリフの形にするという課題にしたことにより、方言や口調を工夫するなど、登場人物に寄り添った読みをしていたように思う。

また、自己評価シートを書く活動も学習を深めることにつながっている。「麦わら帽子」の授業感想の欄には「4つのコツ」や「三要素」などの言葉が書き込まれ、生徒の印象に残っていることがわかる。いくつか生徒の感想を紹介する。

○「小説の三要素」があるんだと知った。もっと読んで、他の本でも探してみたい。

○小説には事件があるということを知った。今度からはそういうことに気を付けて読んでいきたい。

○4つの心情を読み取るコツで、一つ一つの行動などから心情を読み取っていった。とても細かい心情の変わり方だった。
○今日はカモメと、マキの気持ちの変化を読み取った。マキの気持ちの変化が4つのコツでよくわかった。
○少しの文章でも、そこからたくさんのことがわかるのだと思った。心情を読み取るコツが一つ増えて情景描写が加わった。
○心情を読み取ることをやった。情景描写には色や温度、明るさなどで表されているものがあることがわかった。
○情景描写の見つけ方がわかった。話し合いはあまり上手にできなかったので、今度は上手にしたい。
○「口をきかず」と「口をきけず」の違いを考えた。自分から話さない、気まずくてきけないの違いがわかった。
○今日はマキとあんちゃの言いたい言葉をチームで考えた。マキとあんちゃの気持ちや言いたいことがよくわかってよかった。
○麦わら帽子を通して、小説の読み方がわかった。自分の意見もしっかり言えたのでよかった。もっと考えが深まればよい。

⑤　言語事項に関すること

Ⅰで、読むことの学習で身につけさせたい力として「文脈の中における語句の意味を正確にとらえ、理解すること」を挙げている。様々な学習場面で語句の習得をさせたいが、小説の学習指導においては次のような工夫をしている。

まず、国語辞典の活用である。4月当初に辞書指導を行い、必ず授業には辞書を持参させるようにしている。家から持ってきたいろいろな種類の辞書で調べさせた語句の意味を発表させ、どの辞書の説明がこの文脈ではより適切かを考えさせる。辞書を引くスピードや、めんどうがらずに引く習慣付けも学習活動の中でできるだけ取り入れたいと考えている。「○○君、1番。△△さん、2番。」といったちょっとした生徒への声かけをするだけでも速く引こうとする姿が見られ、意欲付けになる。

意味がわからない語句や、音読したときに読み間違えた語句を動作で表すことも効果的である。わからない語句は常に辞書で引くというのは、国語が苦手な生徒には時として苦痛である。そこで「ここに書いてあることを動作でやってみて。」というと喜んでやってみせ、みんなで納得できることもあった。たとえば、「ズボンのすそをたくし上げる」「手提げかばんを平たくして頭に載せ」「頭上の出来事」「けつまずいて」「足踏みしながら待った」「くるぶし」などである。これらの動作化が心情の読み取りに活かされることも多かった。

また、類義語による言い換えも効果的である。たとえば、「麦わら帽子」で、「カモメは無事な片方の翼で砂を飛ばしてマキを近づけなかった。」という表現を、本文では「何かにおびえたような」と表されているが、「これを二字熟語で表したらどうかね？」と問うてみると「警戒」「拒否」「拒絶」などの表現が出てくる。また、カモメと心が通い合う場面では「信頼」「一体感」「一心同体」「運命共同体」などの語句が、最後の「大いばり」「得意」の場面でも「満足」「自慢」「自信」などの表現で言い換えることができる。少しの時間で考えさせ発表させるだけであるが、具体的な叙述を抽象的な表現に置き換えることになり、これらの力も身に付けたい語句

の力である。

なお、語句の意味を調べたり、言い換えたりして得た知識は、できるだけノートの下欄に書かせるようにしている。

⑥ 音読の工夫

小説に限らず、教材文を音読する場面は多い。今回のように小説の読解では毎時間、何らかの形で音読する必要がある。しかし、ただ声に出して読むというだけでは深い読み取りにはつながらない。目指しているのは、確かな読みにつながる音読である。学習の導入部分では漢字の読みや三要素をとらえる音読を行なう。登場人物の心情を読み取るときには、心情を表す叙述を丁寧に読ませたい。学習の終末部分では、読み取ったことが伝わるような音読を工夫させたい。これらの音読の基本となる、声のレベルや明瞭な発音を常に意識させるためにも、様々な条件を付けた音読を取り入れている。

音読について書いた生徒の自己評価シートを挙げてみる。

○うまく音読できたのでよかった。でも自分の声があまりわからないので、声のレベルがうまく調節できない。

○音読することが不得意だったので、今日は家でもっと練習をこなそうと思いました。

○人が読んでいるのを聞いて、人それぞれ工夫の仕方があるんだなと思った。

○発音をきれいにして読みたい。

○今日は読むときにつまってしまったので、気をつけたい。何度も読めば直るかな？　と思いました。

○今日の音読は上手く読めたのでよかった。なるべくつまらないように次からも読みたい。

これは、「声のレベルを3にして、発音を明瞭にし、1分間に300～350字くらいの速さ（範読して示す）で読みなさい。」という条件でリレー音読させ、自己評価シートに感想を書かせたときのものである。生徒は予想以上に、うまく読みたいという気持ちを持っていることがわかる。

何の意識付けもなく音読をさせていると、声の大きさや発音などに無頓着になる。ねらいに応じた条件付けをすることによって、生徒はどのように読むのかということを考えるようになる。

音読には1文リレー読み・段落リレー読み・場面ごとに挙手した生徒への指名読み・会話と地の文を分けた役割読み・自分のペース読み（起立して声のレベル2で自分のペースで読み、読み終わったら座る）・速読（スポーツ実況のアナウンサーくらいの速さでしかも明瞭に）など様々な条件を付けて、確かに読み取るためには音読も大切であることを意識させたい。また、読み取ったことを表現するための音読・朗読も考えさせたい。

おわりに

本研究会の趣旨文にある「その新教材が生徒たちにどのように受容され、生徒たちの『ことばの力』の伸長にどのように貢献するのかということの考察、そして、その新教材を用いてどのような学習指導を構想し、実践」したかということについて、学習を進めていきながら生徒の反応を見て、「こうした方が生徒はわかりやすいだ

ろう。」「なかなかおもしろい反応をするなぁ。ではこうしたらどうだろう。」と考えながら工夫したことをまとめてみた。

小説への興味・関心の度合いも、読み取りの力も様々な生徒にとって、中学校で最初に出会う小説教材はわかりやすいものであることが大切である。「にじの見える橋」は、小学校で最後に学ぶ小説教材よりもずいぶん短く、内容も易しい。辞書指導も含めて3時間程度で扱える長さである。中学生になって心機一転「小説の読み取りができるようになりたい。」と思っている生徒にとって、短時間で小説の読み取りのポイントがつかめる教材である。その上、主人公は生徒と同じ年齢で、その心情には共感できる部分が多く、心情の変化も非常にシンプルである。生徒が「できた。」「わかった。」と思える教材だった。

また、2番目に掲載されている「麦わら帽子」も生徒には受け入れやすい内容だったように思う。主人公の心情に思い当たる節があること、心情の変化に気付くための手がかりになる叙述が、生徒の理解しやすい言葉で表されていることもよかった。また、読み取りの過程で話し合い活動や書くことを取り入れる際にも、生徒にとって考えやすいものだった。指導計画を立てる側から言えば、読みを深める手がかりがそこここに散りばめられている教材だったことで、様々な学習活動が工夫できたと言える。

このように、中学校における小説の学習の入り口にふさわしい教材が、適切に配置されていることは、生徒の側から見ても学びやすく、指導する側からも指導しやすい。

今後は、これまで行なってきた学習が生徒に定着し、次の学習へとつながっていくことを目指したい。そのためには、身に付けた力を基礎にして次の段階に進んでいくことが生徒自身にも自覚できるような指導計画を作成することも考えてみたい。

生徒から「わかった。」「おもしろかった。」「理解できた。」「またやってみたい。」という声が思わず出てくるような学習活動を工夫していきたい。

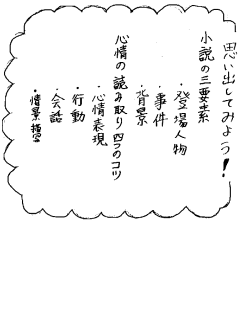
（広島市立大州中学校）

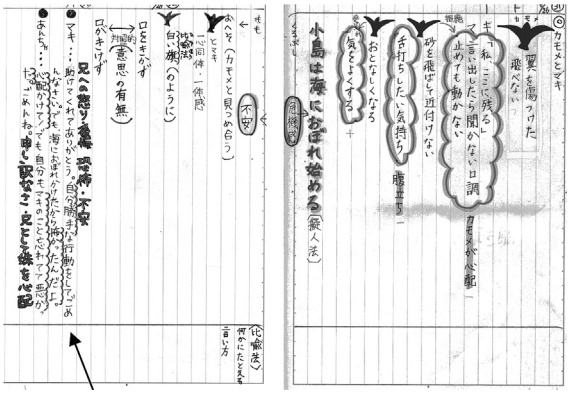
生徒のノート

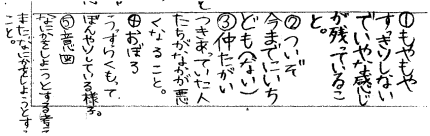
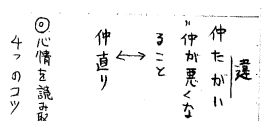
自己評価シート

回	日	授業内容（目標）	忘れ物	挙手	発表	評価	授業感想（2文以上）
34	7/3	文法② 文法の組み立て （文節区切り復習）	教・ノ・ワ・漢・200字・鉛・辞・他	4	1	A	今日は初めて応ようクラスで文法を学びました。文節を区切るのが苦手なので、これから自信をつけていきたいです。
35	7/5	文法② 文節のはたらき （主語述語をさがせ！）	教・ノ・ワ・漢・200字・鉛・辞・他	0	1	B	今日は文の組み立てで、主語と述語を見つけました。述語は文の最後にあるけど、主語はどこにあるかわからないのでこれから気を付けます。
36	7/9	文法②文の組み立て （修飾語をさがせ！）	教・ノ・ワ・漢・200字・鉛・辞・他	0	0	B	今日は文法で修飾語のことを学びました。どのように、どんなをしらべることは、むずかしいなと思いました。
37	7/10	文法②文節の働き （文節の関係）	教・ノ・ワ・漢・200字・鉛・辞・他	1	0	B	今日は、接続語、独立語について学びました。独立語と接続語は主語述語よりわかりやすかった。
38	7/11	文法②文節の働き （文の成分と文節と文節の関係）	教・ノ・ワ・漢・200字・鉛・辞・他	0	2	B	今日は、連文節、並立、補助の関係を学びました。並立と補助が難しくてよくわかりませんでした。
39	7/17	文法の広場② （まとめ）	教・ノ・ワ・漢・200字・鉛・辞・他	0	3	A	今日は「私と家族」の作文をかくことができました。ふだん何気ない生活のなかで大切な存在だなかったことを発見することができました。
40	7/19	まとめ	教・ノ・ワ・漢・200字・鉛・辞・他	0	0	B	今までと、私は小説の情景描写が一番強く心に残りました。ふだん読んでいるときに、心が忙しくなったり暖かくなったりするのは、これが関係していたのだなと思います。これから、苦手な文法をマスターしたいと思います。

三要素や４つのコツを想起する





心情をセリフにして書く

ノートの下欄に語句などを書き込む